慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	周作人とルネサンス
Sub Title	Zhou Zuoren and the renaissance
Author	根岸, 宗一郎(Negishi, Soichiro)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.4 (2011.) ,p.89- 138
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	竹内良雄教授退休記念号
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20110331-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

周作人とルネサンス

根岸宗一郎

周作人の「人的文学」に代表される五四時期の主張について銭理群氏はこう述べている。

「周作人が提出した人間本位の文芸観は、基本的にヨーロッパ・ルネサンス期の人文主義思想の中国における再発見であった。（中略）周作人の人間本位の文芸観は、主に封建的禁欲主義・封建的旧制度・旧礼教による人の個性の抑圧、さらにはこうした封建道徳の観念を宣揚する封建的文学（周作人はこれを『非人間の文学』として斥けた）に対し矛先が向けられていた。このため周作人が五四時期に提出した『人間の文学』というスローガンは当時極めて大きな影響を生み出し、『五四』文学革命の重要な理論的旗印の一つとなった[1]」

銭氏は周作人の「人的文学」の主張をルネサンス期の人文主義思想を中国にもたらしたものとするとともに、当時における「人的文学」の価値を「反封建」的要素に見出している。しかし、周作人が中国にもたらそうとしたル

ネサンス期の人文主義思想、さらにはその源泉である古代ギリシア文化は、「反封建」的性質に収斂されない要素を含んでいたのではないだろうか。古代ギリシア文化と中国文化双方を視野に入れて比較考察する中から、周作人はこれから中国に建設すべき新文化の基となすべき要素をギリシア文化の中に見出していたと考えられる。本稿は周作人のギリシア文化・ルネサンスへの言及を追いながら、彼のギリシア観、そしてルネサンス観を考察し、周作人がギリシア文化の如何なる要素を中国にもたらそうとしていたかを明らかにする。そして、ギリシア文化の導入により目指したものが何であったか、さらにはギリシア文学翻訳紹介に生涯エネルギーを注ぎ続けた理由が何であったのかも明らかにしたい。

周作人は古代ギリシア文学の翻訳紹介をライフワークとし、また新しい中国文化を生み出すためにギリシア文化の受容が必要であることを主張し続けた。そして、ギリシア文化受容により起こったルネサンスを西欧近代文化の出発点として強く意識し、中国における新文化創出のモデルとして念頭においていたと考えられる点が多い。

周作人が古代ギリシア文学、そしてルネサンスに言及するのは、文学活動の初期にあたる日本留学中に発表した最初の文学論「論文章之意義暨其使命因及中国近時論文之失（文章の意義暨び其の使命を論じ、因りて中国近時論文の失に及ぶ）」（一九〇八年五月・六月、『河南』第四・五期、以下「論文章之意義」と略す）においてである。優れた文化は国が滅びても生き続けることの例として、次のように述べている。

「ギリシアに国ができたのはエジプトに次ぐ。文化は時代を経て受け継がれ、この上なく美しく偉大である。蓋し、この国の人が信奉するものはただ美のみであろう。故に、彼らの打ち立てた神の教えは、極めて美しく、

奥深く崇高であって、凡物と全く異なる。[2]」

ここで周作人はギリシア文化の特長として、美の信奉を挙げ、ギリシア神話に表れているギリシアの宗教を「美しく奥深く崇高」と捉えている。[3] 一九〇七年、ハガードとラングの共著“The World's Desire”（訳題：『紅星佚史』）を兄の魯迅と共訳して以来、周作人はギリシア神話への関心を以後一貫して持ち続ける。さらに、「美の信奉」という要素は、十年後の『歐洲文学史』におけるギリシアに対する見方として明確に提示され、以後一貫して維持されていくものであるが、詳しくは後節に譲る。周作人はさらにギリシア文化とルネサンスに関して次のように述べる。

「ギリシアの文化は哲学・文芸を重んじ、人生に裨益するところが特に大きい。（中略）キリスト教が全盛となってヨーロッパを覆った時、困難にぶつかった。（中略）中世の頃、文芸復興（Renaissance）は遠い昔に形成された情勢をついに覆した。この関係の大きさは歴史を読む者にはよく知られており、贅言を要しない。[4]」

すでに拙稿[5]で論じたように、周作人はこの文学論を執筆する際にテーヌの『イギリス文学史[6]』を参照している。特に『イギリス文学史』第一冊序章に述べられた、一国の文学を「人種」「環境」「時代」の三要素から形成されるとする理論を重要な論点として用いているが、同書第二冊「ルネサンス」も周作人のルネサンス観に示唆を与えたと考えられる。

「異なる人種と気候に移植されることで、この異教主義（ギリシア思潮：筆者）はそれぞれの異なる特徴を受け取ることになる。イギリスではイギリス的なものとなり、イギリスのルネサンスはサクソン民族の天賦の才能のルネサンス（復興）である。[7]」

テーヌは、ギリシア思潮がヨーロッパに受容されることで、ヨーロッパ各民族がそれぞれ元来潜在的に持っていた自らの文化を開花させる、というようにルネサンスを分析している。このテーヌの論に従えば、ギリシア思潮を受容することで儒教道徳に束縛される以前の中国文化が復興し、開花することとなり、こうした発想を周作人は持ったのではないだろうか。

周作人は同じ「論文章之意義」において西洋文化の根幹としてギリシア文化が世界に広がり、現在は日本まで及んだという認識を次のように述べる。

「今日に至り、先人（ギリシア人）の残した良い慣わしや勲功は西方に発し、東へ進んで三島の地（日本：筆者）に及んだ。未だにこれを感知していないのは中国だけであるが、ギリシアの国民精神の偉大さはこの上なく敬うべきものである。[8]」

日本の近代化をギリシア思潮の流入によるものとし、中国にはまだギリシア思潮が及んでいないと述べる周作人は、ギリシア思潮の移植により中国文化のルネサンス（復興）をイメージしていたのではないだろうか。そこで、先ず周作人の古代ギリシア観・ルネサンス観を明らかにしていく上で重要と考えられる『歐洲文学史』について見てい

きたい。

第一節：周作人『欧洲文学史』と厨川白村『文藝思潮論』

文学論「論文章之意義」発表の翌年一九〇九年から、周作人は立教大学で古典ギリシア語を学習する。そして、一九一〇年七月三一日と八月一日、『紹興公報』に「古希臘之小説」を発表する。これはロンゴス『ダフニスとクロエー』とルキアノス『本当の話』の紹介であり、周作人最初の古代ギリシア文学の紹介文である。同じ一九一〇年一二月には「希臘擬曲」（ヘーローダース）を翻訳している。帰国後の一九一四年には、四月にサッフォーについて述べた「希臘女詩人」、五月にテオクリトスについて述べた「希臘之牧歌」を『禹域新聞』のために執筆する。また、同年二月にサッフォーとテオクリトスの紹介を含む「藝文雑話」、一〇月にヘーローダースの擬曲の翻訳「希臘擬曲二首」[9]を『中華小説界』に発表する。周作人の古代ギリシア文学への造詣はこうして深められていった。

一九一七年四月、周作人は北京大学で教鞭を執るため故郷の紹興から北京に移る。同年九月より「ギリシア文学史」「ローマ文学史」「ヨーロッパ文学史」（中世から一八世紀まで）の講義を担当する[10]。そして、講義録をまとめて中国最初のヨーロッパ文学史である『欧洲文学史』（一九一八年一〇月）を「北京大学叢書之三」として上海商務印書館から出版する。構成は第一巻「希臘」、第二巻「羅馬」、第三巻第一篇「中古與文藝復興」、第三巻第二篇「十七十八世紀」となっている。周作人の日記などから、この文学史執筆に際して多くの洋書・和書を参考にしたことが分かるが、『欧洲文学史』の要とも言える第一巻と第三巻第二篇の結論の章で用いられているのが厨川白村『文藝思潮論』（一九一四年）である。日記によると周作人が同書を手に入れたのは、一九一七年一一月二日であり、

「ギリシア文学史」等を講義している時期にあたる。周作人『歐洲文学史』については、梁敏兒氏により厨川『文藝思潮論』からの引用箇所の一部がすでに指摘されている。[11] ここでは、厨川『文藝思潮論』からの引用部分に留意しつつ、周作人が他にウォルター・ペイター“The Renaissance”[12]やギルバート・マレー[13]“The Rise of the Greek Epic”など、いくつか重要な参考書も用いながら独自に論を組み立てている点に注目し、周作人の古代ギリシア観・ルネサンス観を明らかにしたい。

先ず、厨川の文学史と周作人の文学史の間に見られる文学史観の異同を見てみたい。厨川『文藝思潮論』の特徴は「第一、序論」の叙述によく現れている。

「歐州の文明史を繙いた人は誰しも、其根底には、明かに人間の本性に基いた二つの異つた潮流が横はつてゐる事に氣がつく。著るしく色調を異にした二つの流れが、そこに一盛一衰、一勝一敗の爭ひの歴史を繰返して來たといふ事實に、强く注意を惹かれるだらう。これが卽ち史家の所謂、人性の異敎的基督敎的二元論、英語でいふ the Pagano-Christian dualism of our human nature で、私の論の出發點も亦たここに在る。」（厨川『文藝思潮論』五～六頁。以下『文藝思潮論』からの引用箇所は「厨川：五頁」のように略して示す。）

そして、ギリシア思潮とヘブライ思潮の相克関係を、肉と霊との闘争とする議論を次のように展開する。

「二つの力の衝突するところに、人生のすべての悲劇は生ずるのである。理想と現實と、個人と社會と、理

性と感情と、智識と信仰と、――そしてまた肉と靈と、これらのものの衝突し分裂するところにこそ、人生の最も慘澹たる悲劇が見られる。そして人生の眞味は、また實にこの悲劇のうちにあるのではなからうか。この靈肉闘爭の問題は、歐州では、靈を重むずる基督教思想に對し、肉を貴ぶ異教思想Paganismの爭となつた。」（厨川：一〇頁）

厨川はギリシア思潮（ヘレニズム）の特徴を「肉的」、ヘブライ思潮（ヘブライズム）の特徴を「靈的」とした上で次のように述べる。

「恁うした全く色のちがつた二つの思想の流れは、現代に至るまで果して如何なる道を辿つて歐州文明の歴史を彩どつて來たか、それをかい摘むで次の數章に述べやうと思ふ。」（厨川：一六頁）

『文藝思潮論』において厨川が、ギリシア思潮とヘブライ思潮との相克を肉と靈との相克としてヨーロッパ文学史を描こうとした点が注目される。

周作人は『歐洲文学史』第一巻「希臘」の終章である第十章「結論：二四、希臘思想」で、前掲の厨川の『文藝思潮論』「第一：序論」を踏まえて次のように述べている。

「ギリシア思想は世俗の教えの代表であり、脱俗の教えであるキリスト教と互いに代わる代わる推移し、時代を形成してきた。世の中のヨーロッパ文明を論ずる者は、二つの『希』が根本にあると言う。即ちギリシア

（希臘）とヘブライ（希伯来）の思想であり、歴史家の所謂人性の二元論とはこれである。[14]」（『歐洲文学史』五六頁。以下『歐洲文学史』からの引用箇所は「周作人：五六頁」というように略して示す。）

第三巻第一篇「中古與文藝復興」第一章「緒論：一、希臘思想與希伯來思想」でも次のように述べている。

「故にヘブライ思想は純粋に脱俗の教えであり、ギリシアの現世主義と正反対である。しかし、反対でありながら並存している、歴史家の所謂人性の二元論（The Pagano-Christian dualism of human nature）であり、偏りがあってはならないのである。故に理想と現実、個人と社会、理性と感情、知識と信仰、或いは肉体と精神、皆この二者の代表であり、互いに対抗し、人の世の悲劇となるが、人生の意義もまたここにある。文芸思潮の消長の情勢もまたかくのごとく、その痕跡は中世においてとりわけ顕著である。[15]」（周作人：一一二頁）

周作人が厨川の肉と霊との相克による文学史の記述を受け入れていることが分かる。厨川はまた、現代（十九世紀末以降）を論じた第五章を「希臘思潮の勝利」と題し、第六章「EPILOGUE」で「現代藝術の特色は之を歴史的に考へれば、つまり基督教思潮に對する異教思潮の勝利に他ならない。」（厨川：二〇〇頁）と述べるように、ギリシア思潮の盛衰を軸にし、現代をギリシア思潮の時代と捉えている。周作人も「新希臘主義の復興は実に現代思想の特徴であることは極めて注意すべき点である[16]」（周作人：五六頁）と述べ、現代をギリシア思潮隆盛の時代とする点で、厨川の見解を踏襲していると言える。

しかし、十七・十八世紀の文学に対する見方において、両者の間には決定的な相違が存在する。十七・十八世紀

文学について厨川は第四「思潮史の回顧（近世）：2、近世史の波瀾」で次のように述べている。

「十七八世紀から十九世紀にかけては、これを希臘思想と希伯來（ヒブルウ）思想との混淆時代と見、二潮流交流の復雑時代と名づけるのが至當であらうと思はれる。（そして十九世紀の末ごろから、二十世紀のはじめにかけての所謂『現代』と呼ばれる時代こそ、頓にまた希臘思潮が絶對優越の地位を占むるに至つた時期だと見るのが、私の論の歸結である）。」（厨川：九五～九六頁）

周作人は第三巻第二篇第七章「結論：二三、古典主義時代之概觀」で次のように述べる。

「以上述べたのは十七・十八世紀ヨーロッパ文学の大綱であり、文芸復興期と合わせて古典主義の文学と呼ばれる。五百年に渡り、国は五、六に分かれるが、共通の現象に貫かれている。すなわち古典を根本としていることである。（中略）古代文学を模範としているが、形式に重点を置いており、この十七・十八世紀の趨勢は文芸復興期とは異なる。源は一つのところから出ているが、流れが異なり、実際には対抗している。[17]」（周作人：一七六頁）

十七・十八世紀の文化がルネサンス期同様にギリシア思潮という一つの源から出ていると周作人が論じていることが分かる。つまり、ギリシア思潮復興によるルネサンスから十七・十八世紀をギリシア思潮の隆盛時代と周作人は位置づけており、十七・十八世紀をギリシア思潮とヘブライ思潮との混淆の時代とした厨川の論と大きく異なるの

である。さらに周作人の議論の大きな特徴は、ギリシア思潮という一つの源から出ていながら、ルネサンス期と十七・十八世紀の文学に相違が見られる理由を次のように分析している点である。

「おそらくギリシア文化は『中和』(Sophrosyne)を以って称えられよう。尚美にして道徳に違わず、主情にして理智を失わない。そして、思索を重んじながらも実行を妨げることがないのである。古典主義もここから出たものであり、(ルネサンス期と十七・十八世紀が：筆者)異なるのはそれぞれ一端が表れているからである。[18]」(周作人：一七六頁)

ギリシア思潮には「尚美」と「道徳」、「主情」と「理智」といった相反する要素が並存していたとし、ルネサンス期は「尚美」「主情」の面が強く表れ、十七・十八世紀は「道徳」「理智」の面が強く表れたとする。注目されるのは、古代ギリシアは「中和」("sophrosyne"：原語は"σωφροσύνη")という要素によりこれら「尚美」と「道徳」、「主情」と「理智」という対立する要素がバランスを保っていたと述べている点である。そもそも"sophrosyne"の訳語として周作人が用いた「中和」という語は、儒家思想において「中庸」の道により到達可能な万事に調和の取れた状態を意味するもので、「中庸」の徳とも言える。周作人が如何にこのギリシア文化の徳を高く評価し、古代ギリシア文化における「主情」「理智」など諸要素が均衡を保ち並存する状態を理想としていたかが分かる。

周作人はさらにルネサンス期の「主情」と、十七・十八世紀の「理智」という対立する要素に着目し、次のように論じる。

「ルネサンス期は古典文学を模範とし、感情に重きを置いたので第一ロマン主義（Romanticism）時代と呼ぶことができる。十七・十八世紀は理性を主として偏っており、第一古典主義（Classicism）時代である。（中略）この二者が相互に推移することで、十九世紀の文学が形成された。最近（十九世紀末から二十世紀初頭：筆者）に至り、合わさって一つとなったのが、新ロマン主義である。[19]」（周作人：一七六～一七七頁）

ルネサンス期の「主情」の要素と十七・十八世紀の「理智」の要素の対立・相克が十九世紀の文学であり、十九世紀末から二十世紀初頭に至って二つの要素に調和がもたらされたとする。従って、「主情」と「理智」の二要素が、古代ギリシアのように「中和」（「中庸」）の要素によりバランスを回復するのが理想であると周作人は考えていたことが分かるのである。十九世紀末から二十世紀初頭の文化・文学における「主情」と「理智」との調和に不可欠の要素として、古代ギリシアの「中和」（「中庸」）という要素を周作人が重視していたことが分かる。このように古代ギリシアの「中和」（「中庸」）を重視する周作人の見方は、同じく十九世紀末から二十世紀初頭をギリシア思潮全盛の時代とする厨川の論には見られない要素と言え、厨川の論を参照しつつも、周作人が古代ギリシア文化の持つ性質を独自に掘り下げていた証拠とも言える。

図表1　周作人のヨーロッパ文学史観

古代からルネサンス期：厨川の理論を踏まえたギリシア思潮（「肉」）とヘブライ思潮（「霊」）の相克

古代ギリシア　　古代ローマ　　中世ヨーロッパ　　ルネサンス期

ギリシア思潮　→　ギリシア思潮　→　ヘブライ思潮　→　ギリシア思潮

霊肉一致　→　肉　→　霊　→　肉（霊肉一致を志向）

ルネサンス以降：ギリシア思潮の内側における、「主情」（ロマン主義）と「理智」（古典主義）の相克

ルネサンス期　　17・18世紀　　19世紀初頭　　19世紀中頃　　19世紀末・20世紀初

第一ロマン主義　→　第一古典主義　→　ロマン主義　→　写実主義　→　新ロマン主義

主情　→　理智　→　主情　→　理智　→　感情と理智の合一

第二節：周作人の古代ギリシア観

次に、周作人の古代ギリシア観を詳しく見て行きたい。『歐洲文学史』第一巻「希臘」第十章「結論：二四、希臘思想」の古代ギリシアに関する叙述について、厨川の論との異同に留意しつつ検討する。周作人は『歐洲文学史』第一巻「希臘」の終章である第十章「結論：二四、希臘思想」で、厨川の『文藝思潮論』「第五：希臘思潮の勝利」から引用して次のように述べている。

「イギリスのFrederick Robertson[20]はギリシア思想を論じて四つの要点を指摘した。一：絶え間ない奮闘、二：現世主義、三：美の崇拝、四：人神の崇拝である。[21]」（周作人：五六頁）

しかし、厨川はロバートソンからの引用のあと、次のように述べる。

「之等は誰が考へても異議のない點ではあるが、私はこゝで希臘思想そのものに就いて論ずるよりは、寧ろそれが如何なる點に於て現代思潮の根底をなしてゐるかを示したいのであるから、必ずしも此ロバアトソンの説には從はないで、別に異つた四つの方面から説く事にした。」（厨川：一三一頁）

そこで厨川は独自に、「1、靈肉合一觀」、「2、聰明の智力」、「3、現在生活の享樂」、「4、美の宗教」という四

つの項目を立て、それぞれ一節を当てて現代思想との関係に重点を置いて論じている。一方、周作人は厨川を参考にしながらも、厨川の項目分けには拠らず、次のように論を進める。

「今これら（Robertson の四つの要点：筆者）を合わせて二つにすることができる。一つは美の宗教、もう一つは現世思想とすると、その要点をほぼ述べることができる。[22]」（周作人：五六頁）

周作人はさらにこう続けている。

「蓋し古代ギリシアの精神は後世の文芸思潮の中に時に見え隠れし、最近に至ってますますはっきり現れている。新ギリシア主義（Neo Hellenism）の復興は実に現代思想の特徴であり、極めて注意すべきものである。[23]」（周作人：五六頁）

この『歐洲文学史』第一巻「希臘」は古代ギリシア文学史なので、周作人は解説を古代ギリシア文化に限定し、現代思想への言及は避けている。しかし、古代ギリシア文化を現代思想・文化の根底をなすものとして見る姿勢も併せ持っていた点は、厨川と共通していることが分かる。そこで、周作人が挙げた、現代文化の根底ともなっている古代ギリシア文化の要素を順に見ていきたい。

先ず古代ギリシア第一の特長、「美の宗教」について見る。周作人はギリシア神話を取り上げて次のように述べる。

「ギリシア神話の内容が美に富んでいる点は、他の民族の及ばないところである。特に異なる点は純粋な神人同形説（Anthropomorphism）である。[24]」（周作人：五六頁）

ギリシア神話に表れた古代ギリシアの宗教が「美の宗教」とされていることが分かる。[25]

さらに周作人は、執筆時に入手したW・ペイター“The Renaissance”の“Winckelmann”（『ルネサンス』「ヴィンケルマン」[26]）から引用して次のように述べる。

「ドイツのヴィンケルマンは『古代美術史』を著し、次のように言っている。世の中でギリシア人ほど美を重んじた民族はいない。神々の祭祀は、美を競って賞を得た少年が行った。スパルタの婦人たちは常にナルキッソスかヒュアキントスの像を祀り、このように美しい子を得ることを願った。少年は神に祈り、国を得るよりもむしろ美しさを得ることを願ったことからも、一時代の風潮を窺える。プラトンも肉体の美を精神の美の表れとした。[27]」（周作人：五七頁）

厨川も『文藝思潮論』第五「4、美の宗教」でほぼ同じ箇所を引用しており、同様の見解であったことが分かる。

厨川はさらにペイター“The Greek Studies”を挙げて次のように述べている。

「ペイタアが名著『希臘研究』“Greek Studies”（二九五頁）に云つた言葉でいふと、希臘宗教の中心動機は、全く『肉體の崇拜』the worship of the body にあつたのだ。」（厨川：一八七頁）

一方、周作人は厨川『文藝思潮論』からこの叙述に続く一節を、先述の「神人同形説（Anthropomorphism）」の説明として次のように引用している。

「ギリシアの彫刻家フィディアスに、なぜ神を人に象るのかと問うと、こう答えた。天地の間で均整のとれた美しさを持つ点において人の肉体を越えるものは何もないから、と。[28]」（周作人：五七頁）

さらに、「ギリシアは美を尊び、人の肉体美を神の属性とした[29]」（周作人：五七頁）とも述べるように、周作人は厨川とペイターの論に基づいて、古代ギリシア人が「神」とともに「美」を崇拝し、しかもその「美」は人の肉体の「美」であると理解したことが分かる。ギリシア神話に表れている古代ギリシアの宗教としての意味よりも、むしろ人の肉体美の崇拝という古代ギリシア人の性質として周作人は「美の宗教」という要素を重視したのである。

次に古代ギリシア第二の特長である「現世思想」についての周作人の解説を見てみたい。

周作人は「（ギリシア人は：筆者）また現世を重んじ、故に人生の快楽も神の属性とした。[30]」とし、ペイター“The Renaissance”‘Winckelmann’（『ルネサンス』「ヴィンケルマン」）から「エピカルモスの詩に、人生の四つの願いが述べられており、筆頭は富と美であった。[31]」（周作人：五七頁）と引用する。さらに厨川第五「希臘思潮の勝利：3、現在生活の享樂」からソロンの言葉を引用して次のように述べる。

「ソロンは幸福について次のように述べた。肉体が強健で、顔立ちが美しく、子孫がたくさんおり、病気や

災いがなく、良い臨終に至るならば、これを完全なる幸福という。[32]」（周作人：五七～五八頁）

さらに周作人はホメロスとピンダロスが描いた死後の世界を例に挙げる。ホメロスの描く冥界は、暗く寒く湿気ていて人の世の楽しみがなく、『オデュッセイア』の中でアキレウスは、冥界の主であるよりこの世の貧乏人の奴隷でいる方がよいと言う（オデュッセウスが冥界に入って聞いた言葉）。一方、ピンダロスは挽歌に、現世の楽しみを享受できる楽園として冥界を描いている。ともに現世への渇望が表れたものと論じ、周作人は次のように結論する。

「蓋し、ギリシアの民は現世の幸福のみを人類の幸福とし、故に努力してこれを求めた。（中略）所謂現実生活の戦士の生活である。故に天国に心を向けて現世から逃避して悩みのない人々とは異なる。[33]」（周作人：五八頁）

一方、厨川は第五「希臘思潮の勝利：3、現在生活の享樂」において次のように述べる。

「異教思潮の現世主義、卽ち天國や未來を祈願せずに、現在當面の生活を享樂して人生の歡樂に醉はうとする傾向、これが卽ち現代思潮の一面であつて、また中世などの基督教思想と全く相反する點である。（中略）世に最近の思潮を呼ぶに新希臘主義（ニオヘレニズム）の名を以てする人のあるのは恐らく此點に着眼したのであらうと思ふ。」（厨川：一五四頁）

厨川はギリシアの現世主義を、現代思潮に顕著に現れ、中世のキリスト教思想と正反対の要素として位置づけている。周作人も厨川の論を踏まえ、キリスト教思想と正反対の要素であり、また現代思潮に見られる重要な要素としてギリシアの「現世思想」を評価していたと考えられる。

周作人は「美の宗教」・「現世思想」という二つの特長を述べた後、厨川と異なりさらに第三の特長を次のように述べている。

「ギリシア思想には以上の二つ（美の宗教と現世思想：筆者）とともに、これらを節制する第三の徳がある。そのため極めて盛んに発達することが可能で、行過ぎることがないのである。蓋し、この民（ギリシア人：筆者）には特に中和の性質（Sophrosyne）が備わっており、放逸（Hybris）を強く戒めている。[34]」（周作人：五八頁）

この叙述はマレー“The Rise of the Greek Epic”を踏まえたものと考えられ、[35]周作人はマレーのギリシア古典研究から“sophrosyne（原語 σωφροσύνη）”、すなわち「中和」という古代ギリシア人の特長を取り出して、「中和の性質（sophrosyne）」が霊肉の肉的要素である「美の宗教」と「現世思想」の行き過ぎを調節し、健全な発達が可能であったとしている。先述のように“sophrosyne”に儒家思想において最高の意味を持つ「中和」という訳語を当てたことからも、周作人が如何にギリシア文化の“sophrosyne”という徳を高く評価したかが窺われる。そして、

古代ギリシアは「美の宗教」と「現世思想」の二要素に加えて、「中和の性質（sophrosyne）」という要素を持つことで、理想的な霊肉一致の状態が実現されていたと周作人は考えていたと言える。

また、第一巻「希臘」第十章「結論：二四、希臘思想」で、古代ローマ人がこの“sophrosyne”の徳を持たなかったため頽廃し、ついにヘブライ思潮に征服されたと周作人は述べている。“sophrosyne”という要素の欠如が、霊肉のバランスを失わせ、ギリシア思潮がヘブライ思潮に取って代わられる原因となったという見方は、裏返すならば“sophrosyne”の徳を持つことにより、ギリシア思潮とヘブライ思潮との相克、肉と霊との対立から脱却し、ギリシア思潮の内部において霊肉一致の文化をもたらすことが可能だという見方につながる。

周作人は先述のように、「中和」（sophrosyne）という要素により、ギリシア思潮がヘブライ思潮と相克の関係となる以前の古代ギリシアにおいて、理想的な霊肉一致の状態が実現されていたと考えていた。すなわち、ギリシア思潮の内部には「肉的要素」＝「美の宗教」・「現世思想」のみではなく、「中和」という要素が存在することで、霊肉一致が実現されていると考えたのである。そして、ルネサンス以降のヨーロッパを十七・十八世紀も含めてギリシア思潮隆盛の時代とする自身の見解を踏まえ、ヨーロッパ文化を中国にもたらそうとする際、ギリシア思潮の「美の宗教」・「現世思想」・「中和」という三要素を導入すべきであるという認識を持っていたと考えられる。そして、このギリシア思潮の三要素を導入することによって招来しようとしたのが中国におけるルネサンスだったのではないか。

周作人は現代に至るギリシア思潮の流れを次のように述べている。

「ギリシア思想は中絶するも、さらに千年を経て再び現れ、文芸復興の主要因となり、今日に至ってはます

ます隆盛となっている。[36]」（周作人：五九頁）

十九世紀末からを「ギリシア思潮の勝利」とする厨川の見解を踏まえて、周作人は現代をギリシア思潮隆盛の時代と述べている。また先述のように周作人は、日本の近代化をギリシア思潮の導入による一種のルネサンスとみなしてもいた。[37] 西欧ルネサンスからすでに約四百年を経ていながら、中国へギリシア思潮を導入することが決して時代遅れでないという判断の根底にはこうした時代認識があったと言える。

第三節：ルネサンスと「美の宗教」

ルネサンスの発生に関して周作人は『歐洲文学史』でどのように論じているだろうか。『歐洲文学史』第三巻第一篇第四章「異教精神之再現：五、Aucassin et Nicolette 与浪游之歌」がルネサンスの発生を論じており、厨川『文藝思潮論』とともに、先述のW・ペイター“The Renaissance”が重要な参考書として用いられている。

『歐洲文学史』第三巻第一篇第四章では『オーカッサンとニコレット』と『カルミナ・ブラナ』の二作品を扱っているが、前者に関する叙述は、W・ペイター“The Renaissance”の“Two early French stories”（古代フランスの物語二篇）に拠っている。

『オーカッサンとニコレット』は王子オーカッサンと奴隷の身である乙女ニコレットが困難を乗り越えて結ばれるまでを描く十三世紀初頭のフランスの恋物語である。ペイターは『オーカッサンとニコレット』を純粋な異教思想の作品とし、作品から象徴的な表現を取り出す。オーカッサンがニコレットを妻とするならば地獄落ちの刑罰を

受けるだろうと脅された際の答えである。オーカッサンには、天国へ行く道には年老いた弱々しい司教たちしか見えず、一方、地獄への道には優れた学者・役者・騎士・貴婦人が見えることから、地獄への道を選ぶと答えたのである。周作人はこのペイターの叙述を略述し、オーカッサンが天国を棄て地獄に行こうとする部分は現世思想が強く表れていると述べる。その上で、ルネサンスの開始[38]について述べた部分を次のように引用する。

「イギリス人ペイターは次のように論じている。『中世の文芸が（中略）復興したとき、人々は心の自由を得ようとし、理性と想像力の発展を求めた。この時の極めて大きな特色は、非礼法主義（Antinomianism）であった。宗教道徳に反抗し、官能と想像力の悦楽を求め、美および人体を崇拝することは皆キリスト教思想と反対であった。[39]』」（周作人：一一九～一二〇頁）

当該部分はペイターの原文では次のようになっている。

「中世における理性と想像力の突然の出現、心の自由の主張、それを私は中世のルネサンスと名づけたが、これらの最も強い特徴の一つは反道徳主義、つまり当時の道徳や宗教の考えに対する反抗である。感覚や想像力の快楽の追求、美の愛好、肉体の崇拝において、人々はキリスト教が理想とする境界を踏み越えざるを得なかった。[40]」

つまり、ペイターはルネサンスの萌芽を「美の崇拝」によるキリスト教道徳への反抗に見ており、周作人はペイタ

ーの叙述を一部省略して訳してはいるが、ペイターの見方を受け入れていると言える。周作人はさらに続けてペイターの言葉を次のように引用する。

「新しい宗教を建てたかのように恋愛を尊んだのは、蓋し異教の神々の復帰と言えよう。古い伝説には次のように言う。Venusは死せず、ただ山の洞窟に隠れ住んでいただけであり、時至って再び出てきたのである。[41]」（周作人：一二〇頁）

このようにペイターは愛と美の女神ウェヌス（ヴィーナス。古代ギリシアのアフロディテ）の復帰という象徴的な描き方で、「美の宗教」によるルネサンスの発生を述べる。そして、周作人は、ルネサンスが人の肉体美の崇拝、さらには恋愛感情がキリスト教道徳への反抗を呼び覚ましたところから始まったとするペイターの論を、受け入れているのである。

『欧洲文学史』第三巻第一篇第四章の後半は、『浪游之歌』即ち『カルミナ・ブラナ』を扱っており、厨川『文藝思潮論』「第三、思潮史の回顧（中世）」に基づいている。厨川はルネサンスの萌芽について次のように論じている。

「恁ういふ禁慾主義萬能の世界に於てすら、なほ人間自然の本能の慾求に根ざした異教的現世主義が、隱然動かすべからざる潜勢力を有してゐた」（厨川：五八頁）

そして「當時潜むでゐた美的享樂の思想を最もよく表はしたもの」（厨川：六六頁）として『カルミナ・ブラナ』[42]を挙げ、詩を数首引用している。周作人も、「人の肉体美を詠んだものとして最も著名である[43]」（周作人：一二〇頁）と述べた“Lydia Bella”（美しきリュディア）の一節は次の通り。

「輝けるリュディア　あなたは真っ白な乙女
朝のあたらしいミルクよりもずっと
光の中の若い百合よりもずっと。
あなたの白薔薇の肌と争うなら
赤薔薇も白薔薇も色は青ざめて
磨かれた象牙もかなわない　磨かれた象牙も。[44]」

周作人は厨川の叙述に基づいて次のように述べる。

「詩の多くは宗教の頌歌の形式にならうが、ただその内容は詩・酒・恋愛の三つで、信仰に背を向け、礼法から脱し、生を楽しみ美を享受することを人生の目的としている。（中略）その思想はすでに当時の信仰制度に属さず、異教精神に復帰し、ルネサンスへの道を開いたのである。[45]」（周作人：一二〇～一二一頁）

「美の宗教」はすなわち「人の肉体美の崇拝」であり、「恋愛」も含むものであったと言える。この「人の肉体美の

崇拝」、「恋愛」の感情と「現世思想」がキリスト教道徳を覆しルネサンスを引き起こす原動力となったと、周作人はペイター、厨川の論を踏まえて論じているのである。従って、周作人は、ルネサンスの発生に関して、先述の「美の宗教」「現世思想」「中和」という古代ギリシアの三つの特長のうち「美の宗教」と「現世思想」が特に重要であったと考えていたと言えよう。

周作人は、一九一八年一〇月に『歐洲文学史』を上梓したすぐ後、同年一二月に「人的文学」を『新青年』第五巻第六号に発表する。先述のように銭理群氏が「周作人が提出した人間本位の文芸観は、基本的にヨーロッパ・ルネサンス期の人文主義思想の中国における再発見であった」[46]と述べているように、周作人の主張にはルネサンス期のヨーロッパにおけるギリシア文化紹介に相当する内容が含まれていたと言える。

「人的文学」の「霊肉一致」を論じた部分は、厨川『文藝思潮論』からの引用と考えられる部分があり、「霊肉一致」を理想の人間像とする見方が厨川の論に基づくという指摘がすでに多数ある。[47]先述のように、厨川は『文藝思潮論』第五「希臘思潮の勝利」において現代思潮の根底をなしているギリシア人の特長四つのうちの一つとして「靈肉合一觀」を挙げている。そして、「希臘人の抱いてゐた物質論の思想は、（中略）寧ろ最近思潮の一面である物質卽精神の思想、換言すれば靈肉合一觀であつた」（厨川：一三一～一三二頁）と述べる。周作人が「人的文学」で「霊肉一致」の理想を掲げた際、厨川『文藝思潮論』において霊肉一致の特長を具えたものとされる古代ギリシア文化が念頭に置かれていたことは明らかである。そして、その背景には、厨川『文藝思潮論』を参考書の一つとして書かれ、半年前に脱稿した『歐洲文学史』におけるギリシア思潮、古代ギリシアに関する理解があったと言えよう。「人的文学」では人間性に基づく文学の一つ、親子の愛を描いた文学としてホメロス『イリアス』とエウリ

ピデス『トロイアの女』が例として挙げられてもいる。霊肉一致の理想を体現した古代ギリシア人像に象徴されるギリシア思潮を中国へ導入しようとする意識が周作人にあったと言える。

周作人は、「人的文学」においては「霊肉一致」を述べる以外にギリシア文化の特長へ言及していない。ギリシア文化の特長を詳しく論じるのは、一九二一年のギリシア文化と中国文化の比較論においてである。一九二一年六月から九月の西山療養期前後で周作人に思想的危機、すなわち「人的文学」に見られたトルストイ的人道主義の思想の挫折と文学観の転換が小川利康氏や尾崎文昭氏により指摘されている[48]。この西山療養の終盤に周作人はギリシア文化と中国文化の比較論「新希臘與中国」（『晨報副鐫』一九二一年九月二九日）を書いている。ギリシアと中国とを比較して多くの共通点を挙げた上で次のように論じている。

「私が言わんとすることは、ギリシアが中国と同じく年老いた国であり、同じくこれらの短所がありながらも、ついにトルコの束縛から抜け出すことができ、今では立派な国家となっているのは一体なぜかということである[49]。」

「ギリシア人には一つの特性がある。祖先から受け継がれてきたものでもある、熱烈に生を求める欲望である。なんとか生命を保とうとするのではなく、美しく健全な充実した生活を求めるのである[50]。」

「熱烈に生を求める欲望」すなわち「美しく健全な充実した生活」を求める特性とは、先述の「美の宗教」と「現世主義」の特性と言える。周作人は中国も「現世主義」を充分に持っているとしているので、中国に欠けてい

るのは「美の宗教」（＝「人の肉体美の崇拝」）ということになる。周作人は、中国にギリシアの特性、とくに「熱烈に生を求める欲望」の原動力としての「人の肉体美の崇拝」の精神を学び取ることを主張しているのである。

西山療養後も周作人のギリシアへの関心は持続しており、『歐洲文学史』に見られたギリシアの「美の宗教」への評価も一貫している。西山療養以降、古代ギリシア文学作品の翻訳が次々と行われているのはその証左とも言えよう。[51]

第四節：「生活之藝術」の理想と古代ギリシア

銭理群氏は、「生活之藝術[52]」執筆当時（一九二四年）の周作人について、五四時期以来の主張からの転換を指摘して次のように述べている。

「こうした『新しい自由と新しい節制』は、『西洋文化の基礎であるギリシア文明と相合一する』のみならず、必然的に孔孟の『「本来の礼」と「本来の中庸」の復興』であった。これ以前は、彼（周作人：筆者）は主に西洋に出口を求め、西洋文明を借用して東洋の伝統文化に衝撃を与えようとした。今や彼は西洋文化と東洋の伝統文化の共通点を求めることに努力し始めた。（中略）彼が追求した『生活の芸術』は英国紳士の雰囲気があるだけでなく、中国伝統の封建士大夫の色彩がより濃く、彼の個性の特徴をも示している。[53]」

銭氏は、「生活之藝術」執筆時期において周作人の西洋文化に対する意識が、西洋文化を手段として「東洋の伝統

文化へ衝撃を与える」ことから「西洋文化と東洋の伝統文化との共通点を求める」ことへ転換したと指摘している。しかし、この時期の周作人のギリシア文化に関する議論を辿るならば、必ずしも「共通点を求める」とは言えない側面が浮かび上がってくる。そこで「生活之藝術」を見てみたい。

「生活之藝術」において周作人は、千年以上前の中国では霊肉一致が実現した時期があり、その後現在まで禁欲思想により「無自由」・「無節制」の状態となったと論じる。そして、「生活の芸術とは禁欲と放縦の調和にこそある。[54]」と述べた上で、H・エリスの意見として“Affirmation”‘St. Francis and others’（『断言』「聖フランシスその他」）から次のように引用する。

「この二者（即ち禁欲と耽溺）の一方を生活の唯一の目的とするものがあったなら、その人は生活する前にすでに死んでいることになろう。[55]」

「生活の芸術とは、その方法は取捨の二者を微妙に織り交ぜることにこそある。[56]」

周作人はこの「生活の芸術」を中国古代の「礼」という概念と共通するとし、「礼節あり中庸を重んじる中国では本来決して新奇な物ではない。[57]」と述べる。周作人はエリスの「生活の芸術」の思想を「中庸」の概念として理解していることが分かるが、[58]エリスは“St. Francis and others”において次のようにも述べている。

「現在を生き、現実の悪と善とに苦しんだり喜んだりし、それに正々堂々と向き合って責任を持つ。これは私たち（イギリス人：筆者）にできることではない。これはギリシア人やローマ人のやり方であって、私たち

のやり方ではないのだ。[59]」

周作人はエリスの書からギリシア人を「生活の芸術」を具えたものとして見なしたはずである。[60]先述のように周作人は一方で古代ギリシア文化の“sophrosyne”という特徴を「中和」（中庸）として高く評価していた。従って、ここで周作人が述べる「中庸」の概念には、エリスの「節制」という意味とともに古代ギリシアの“sophrosyne”が意識されていたと考えられる。そこで、先述の銭氏の指摘にあった周作人の次の叙述を考えてみたい。

「中国に現在差し迫って必要なのは新しい自由と新しい節制である。中国の新しい文明を作り出すことは、すなわち千年以前の旧文明の復興でもあり、西方の文化の基礎であるギリシア文明と相合一することでもある。[61]」

エリスの理論に適う、中国古代に存在した「礼」に代表される文明の復興という論理と並んで、「ギリシア文明と相合一する」という主張がなされているのはなぜであろうか。「中庸」と“sophrosyne”が等しいものとするならば、「千年以前の旧文化の復興」と「ギリシア文化との相合一」とは「中庸」＝“sophrosyne”の文化を目指すという点において同一の意味を持つように見える。しかし、「ギリシア文化との相合一」という言葉には、古代中国文化と古代ギリシア文化が「中庸」＝“sophrosyne”という共通性を持つが故に合一することが可能であるということ以上の意味が含まれているのではないだろうか。「ギリシア文化との相合一」することは古代中国文化にない文化的要素をもたらす可能性も含んでいる。周作人はギリシア文化と中国文化を比較考察し、中国文化に欠如し、ギリシ

ア文化から取り入れるべき要素を探し出していたのではないか。

「生活之藝術」において周作人はギリシア文化について多く触れていないが、翌年一九二五年からギリシア神話に関する議論を通してギリシア文化の特長に関する言及を行っていく。一九二五年八月、J・E・ハリソン“Mythology”の第三章からの抄訳である「論鬼臉」（『語絲』四二期）を発表する。[62] ここで周作人はギリシア神話を語る際に以後度々引用することとなる言葉を引いている。

「宗教の恐怖の要素を取り除くことは、ギリシアの美術家と詩人の職務であった。このことは私たちがギリシア神話の作者に負った最大の借りである。[63]」

また、翌一九二六年八月には「『希臘神話』引言」（『語絲』九四期）として、ハリソン“Mythology”引言を翻訳しており、次の言葉が注目される。

「ギリシア民族は祭司の支配を受けず、詩人の支配を受けていた。『詩人』（Poetes）という語の原義を考えれば、確かに『作り出す者』であり、芸術家の民族なのである。[64]」

ギリシア人を「詩人の支配する芸術家の民族」と捉えるハリソンの論は、周作人がペイター、厨川などを通してギリシア文化の特長を「美の宗教」とした捉え方の延長線上にあったと言えよう。また、ギリシア神話を「美の宗教」の表現とする評価も『歐洲文学史』以来の評価を引き継いだものである。

そして、一九二六年一二月二四日に周作人は「希臘閑話」（『新生』一巻二期）を発表し、ギリシア文化と中国文化の比較論を展開するので、詳しく見ていきたい。先ずギリシア文化の特長について次のように述べている。

「ギリシア文明の精神は、神話の中にふんだんに表現されている。この精神の特長――すなわちギリシアの人生観の特長でもある――は二つある。一つは現実主義、一つは愛美の精神である。[65]」

「現実主義」については次のように述べる。

「（一）古代の現世主義は、ギリシアに代表される。『死後の生活がどのようか』という問題について、神話の中に二種類の答えがある。[66]」

周作人は例として、一つはホメロス、もう一つはピンダロスの描いた冥界を挙げるが、『歐洲文学史』第一巻第十章「結論：二四、希臘思想」の「現世思想」に関する説明で挙げた先述の例と同じである。従って、「現実主義」とは『歐洲文学史』で論じたギリシアの特長の一つ「現世思想」と同義で用いられていることが分かる。

次に「愛美の精神」について見てみたい。

「（二）ギリシア民族は従来美を愛する民族であり、彼らの理想における神の形象は他の民族とは異なっていた。中国の神は三面六臂で顔は青く、牙があるなど奇怪な姿をしている。エジプトの神はさらに人面獣身の恐

ろしい形象である。ギリシアの神はそうではなく、みな美しく、人と同じ形象である。[67]」

さらに、『歐洲文学史』第一巻第十章から「美の宗教」を解説した部分と同じく厨川から引いたフィディアスの言葉を次のように引用する。

「ある人が彫刻家のフィディアスに、なぜ神と人は同じかと尋ねると彼はこう言った。神はおそらく最も見目良きものであり、世の中で最も美しいのは人だけである。それ故に同じなのである。[68]」

従って「愛美の精神」の説明は、『歐洲文学史』における「美の宗教」の説明とほぼ重なり、「愛美の精神」が「美の宗教」と等しい意味で用いられていることが分かる。さらにハリソン“Mythology”を踏まえて次のように述べる。

「ギリシアの宗教は専門の祭司たちがおらず、定まった聖書もなかった。宗教上の伝説を保存するのは詩人と美術家の一集団のみである。そのため彼らは原始時代から伝えられてきた醜い要素を次第に美化することができたのである。[69]」

そして、“Mythology”第三章から怪物ゴルゴンや復讐の女神エリニュエスなどの例を挙げて恐怖の要素が取り除かれ、美化されていく過程を示した上で次のように述べる。

「この『美化』の精神は、すなわちギリシア人の現世主義と愛美の観念の充分な表現であり、文化の進化と極めて関係が深い。ヨーロッパ中世の暗黒時代が変化してルネサンスとなったことは一つの実例と言うことができる。[70]」

周作人は、古代ギリシアの二つの特長「現世主義」と「愛美の精神」（「美の宗教」）の表れを「美化の精神」とし、ルネサンスの原動力として位置づけている。その上で古代ギリシアと中国の比較に論を進め、次のように述べる。

「中国の現世主義は敬服に値する。（中略）しかし、中国文明にはギリシア文明の愛美の特長がない。そのため似てはいても俗悪な方面に流れることを免れないのである。[71]」

「現世主義」は中国にも充分に存在するので、周作人が中国に移植しようとしている要素が古代ギリシア文化の「愛美の精神」すなわち『欧洲文学史』以来重視してきた「美の宗教」であったことが分かる。また、この「愛美の精神」（「美の宗教」）を体現した作品としてギリシア神話を評価していたことも分かるのである。

「美の宗教」という中国にないギリシア文化の要素を強く求める周作人の姿勢は、『欧洲文学史』以来一貫している。「生活之藝術」執筆時期においても、「sophrosyne（中和・中庸）」という西洋文化との共通点の追求とともに、中国文化に欠如した「美の宗教」というギリシア文化の要素の導入を目指していたと言えよう。

結び

周作人は、一九二六年『駱駝』にテオクリトスの牧歌[72]、一九三〇年『駱駝草』にヘーローダースの擬曲を翻訳発表する。そして、一九三四年三月と五月、『青年界』に「希臘神話一」（五巻三期）と「希臘神話二」（五巻五期）を発表する。これらはハリソンのギリシア神話論の「美化」精神を軸に論じている。後者ではF. A. Wright "A History of Later Greek Literature"[73]やアポロドーロス『ギリシア神話』（原題：『書庫』。原語"βιβλιοθήκη"）のフレーザーによる解説[74]を引き、古典ギリシア語で書かれたギリシア神話としてアポロドーロスのものを高く評価する。そして、この時期にアポロドーロス『ギリシア神話』の翻訳を思い立ち、一九三七年夏、日本占領下の北京において翻訳を開始し、一九三八年末までに第一章と第二章、及び本文の倍近くの注釈を完成させる。その後六年の空白を経て、一九四四年に翻訳を再開し、同年八月に引言を執筆、十月から十二月まで『藝文雑誌』に連載する。「美の宗教」を体現した作品であるギリシア神話の古典ギリシア語原典からの翻訳がこうして開始されたのである[75]。

同じ一九四四年、周作人はギリシア文化とルネサンスに関する文章を数篇発表する。この時期、周作人は日本占領下の北京で傀儡政権の「華北政務委員会」教育総署督弁の職からは退き、「偽北京大学」文学院長を務めていた。またこれ以前には、「中国の文学と思想に関して書いた文章のうち比較的重要な四篇[76]」と周作人自身が『知堂回想録』で語った、「漢文學的傳統[77]」（一九四〇年三月）・「中國的思想問題[78]」（一九四二年十一月）・「中國文學上的兩種思想[79]」（一九四三年四月）・「漢文學的前途[80]」（一九四三年七月）という一連の文章を発表している。これらの文章について木山英雄氏は、現実離れした理論のように見えるが、日本占領下で現実の抵抗手段を奪われた情況にあって、

可能な限りの抵抗として意味を持っていたと論じている。[81] また、「復古による再生という構想に托された中国自前の近代化の理想が、彼をここまで導いたのは、事実であろう。[82]」と木山氏が述べるように、一九四四年になると中国文化再生に関する文章を発表する。「新中國文學復興的途徑[83]」（一九四四年一月二〇日）で、周作人は中国新文化運動をルネサンスとみなし、大きな成果をあげる障害となったのが、知識人の実利偏重の気風にあったとする。そして、これから改めてルネサンスを起こそうとする場合に必要なことを次のように述べる。

「上は聖人賢人から下は庶民までが共有する中国固有の思想を見極め、世界人類の新しい文明を外から加え、大胆にしかもきめ細かく調整を行い、基礎を定めて、ようやくそれから文化の事業を進めることができるということである。[84]」

これに続いて、周作人は一九四四年二月二九日に「文藝復興之夢[85]」を発表し、中国におけるルネサンスに関する議論を述べる。

「ヨーロッパ中世の前例に拠れば、固有の政治宗教の伝統の上に、外来の文化の影響が加わることで変化が発生し、結果としてルネサンスという輝かしい歴史の一時代となるのである。中国にもしもルネサンスが起こるとするならば、その原因もほぼこれと同様のはずである。[86]」

そして、外国文化の導入について次のように述べる。

「外国文化の影響については、流れを遡って源を尋ねるべきである。現代（の文化：筆者）だけで足るとせず、直接その古典の根源を尋ね求めて受容すべきである。[87]」

外国文化の受容においては古代ギリシア文化を重視すべし、という新文化運動以来の主張を繰り返している。この後、周作人は一九四四年五月三一日「希臘之餘光[88]」を書き、ハリソンなどのギリシア人の「愛美の精神」（「美の宗教」）に関する叙述を引用した上で次のように述べる。

「このように見ると、ギリシア人の愛美は決して単純なものではない。これが恐怖の除去と結びつき、後世に巨大な影響を与えたことは非常に注目に値する。[89]」

周作人は、中国文化再生に不可欠なものとして「美の宗教」の論をこの時点でも一貫して主張しており、十月から十二月にかけて「美の宗教」を体現した作品であるアポロドーロス『ギリシア神話』を古典ギリシア語からの原典訳で連載する。

「ギリシア・ローマの文化はすでに古いものである。しかし、その神通力はいま再び極めて大きくなっている。当時（ルネサンス発生当時：筆者）の古典の研究と伝播はつれづれの仕事のようでありながら影響力がこれほどであるのは、不思議に見えるが、実は決して不思議ではないのである。[90]」

「文藝復興之夢」でこう語っているように、周作人が古代ギリシア文学の翻訳紹介を一生涯たゆまず続けることとなった動機は、中国へ古代ギリシアの「美の宗教」を移植し、ルネサンス招来により中国にかつてなかった新しい文化を芽吹かせようという理想にあったのではないか。中華人民共和国成立後は中国共産党の指示により、外国文学の翻訳のみを仕事とせざるを得なくなるが、周作人は古代ギリシア文学の翻訳を継続することで「美の宗教」の移植に力を注ぎ続けたと言えよう。周作人が一生涯力を傾けた古代ギリシア文学の翻訳紹介活動は、一人の人間としてできうる限りのギリシア思潮導入の実践に他ならなかったのである。

注

（1）「周作人所提出的人本位主义文艺观基本上欧洲文艺复兴时期人文主义思想的在中国的再发现。（中略）周作人的人本位主义文艺观其主要矛头是指向封建禁欲主义、封建旧制度、旧礼教对于人的个性的压抑，以及宣扬这种封建道德观念的封建文学（周作人把它斥为〝非人的文学〟）。因此，周作人在五四时期所提出的〝人的文学〟的口号，在当时产生了极大影响，成为〝五四〟文学革命重要的理论旗帜之一」（钱理群『周作人论』第一编「二、探索中国现代文学发展的道路——周作人、鲁迅文学观的比较」四六頁）

（2）「希腊立国，亚于埃及，而文教之降，亦美伟媲于无极。盖国人信慕所归，物唯在美。故即所立神道之教，美妙玄崇，绝异凡轨。」（「論文章之意義暨其使命因及中国近時論文之失」一九〇八年五月、『河南』第四期。『周作人散文全集』第一巻、八九頁）

（3）テーヌ『イギリス文学史』（Hippolyte Taine “A Historie de la Littérature Anglaise”）序章にはギリシアに関して次のような叙述も見られ、周作人のギリシア観に示唆を与えたと考えられる。

「私たちがギリシア悲劇を読む時、先ず最初に留意すべきことは、ギリシア人を心に描くことである。競技場や広場

で、輝きわたる空の下、この上なく美しく気高い風景と向き合いながら半裸で生活する人々。敏捷で強い肉体を鍛えること、会話や議論、投票、愛国的な海賊行為をすることに専念し、そうする他はのんびりとして節度ある人々。（中略）この上なく美しい都市を持ち、この上なく美しいパレードを催し、この上なく美しい思想を抱き、この上なく美しい人間となること以上には何も望まない人々を。」（『イギリス文学史』序章）

“when we read a Greek tragedy, our first care should be to realize to ourselves the Greeks, that is, the men who live half naked, in the gymnasia, or in the public squares, under a glowing sky, face to face with the most beautiful and the most noble landscapes, bent on making their bodies lithe and strong, on covering, discussing, voting, carrying on patriotic piracies, nevertheless lazy and temperate,（中略）with no desire beyond that of having the most beautiful town, the most beautiful processions, the most beautiful ideas, the most beautiful men.” (H. Taine “History of English literature”, translated by H. Van Laun, p.4)

（4）「希腊之化，重在哲理艺文，斯为益于人生者尤大。当景教全盛，泛滥泰西时，其机一厄。（中略）中古之顷，文艺复兴（Renaissance），遂翻千古已成之局。此关系之大，读史者皆所深知，可无赘述。」（「論文章之意義暨其使命因及中国近時論文之失」：『河南』第四期。『周作人散文全集』第一巻、八九～九〇頁）

（5）拙稿「周作人におけるハント、テーヌの受容と文学観の形成」（『日本中国学会報』第四十九集、一九九七年一〇月）。

（6）Hippolyte Taine (1828-1893) “A Historie de la Littérature Anglaise” (Paris, Hachette, 1863-1864, 4vol.)。周作人は H. Van Laun による英訳本 “History of English Literature” を用いた。

（7）“Transported into different races and climates, this paganism receives from each distinct features and a distinct character. In England it becomes English; the English Renaissance is the Renaissance of the Saxon genius.” (Taine “History of English Literature”. translated from French by H. Van Laun. Vol.1 p.250)

（8）「降及今日，而流风余烈且发西方，东及三岛之地。所未感知者，独中国耳。然而希腊国民精神之伟大，亦已至可钦异者已。」（「論文章之意義暨其使命因及中国近時論文之失」：『河南』第四期。『周作人散文全集』第一巻、九〇頁）

(9)『周作人研究資料』(張菊香・張鉄栄編、天津人民出版社、一九八三年)、『回望周作人・資料索引』(孫郁・黄喬生主編、河南大学出版社、二〇〇四年)などでは一九一六年一〇月(『中華小説界』第一巻第一〇期)の発表となっているが、正しくは一九一四年一〇月(『中華小説界』第一巻第一〇期)である。

(10)「ギリシア文学史」と「ローマ文学史」は、それぞれ半期(半年)完結の講義で、前期が「ギリシア文学史」、後期が「ローマ文学史」であった。

(11)梁敏兒「廚川白村與中國現代文學裏的神秘主義」(『中国文学報』第五六冊、一九九八年四月)。なお、中国における廚川白村の受容については、工藤貴正『中国語圏における廚川白村現象:隆盛・衰退・回帰と継続』(思文閣出版、二〇一〇年二月)がある。

(12)Walter Pater (1839-1894) "The Renaissance, Studies in Art and Poetry"。本文中では"The Renaissance"と略す。なお、初版の題名は"Studies in the History of the Renaissance"(London, Macmillan, 1873)。邦訳には、富士川義之訳『ルネサンス』(『ウォルター・ペイター全集』第一巻所収。筑摩書房、二〇〇二年二月)、別宮貞徳訳『ルネサンス』(冨山房、一九七七年)などがある。

(13)Gilbert Murray(1866-1957)はイギリスの西洋古典学者。"The Rise of the Greek Epic"(Oxford, Clarendon Press, 1907)の他にG. Murray "A History of Ancient Greek Literature"(London, William Heinemann, 1897)。周作人は参照したと思われる。

(14)「希腊思想为世间法之代表,与出世法之基督教,递相推移,造成时代。世之论欧洲文明者,谓本于二希,即希腊与希伯来思想,史家所谓人性二元者是也。」(『歐洲文學史』五六頁)

(15)「故希伯来思想,纯为出世之教,与希腊之现世主义正反。然虽相反,而复并存,史家所谓人性二元(The Pagano-Christian dualism of human nature),不能有偏至者也。故凡理想与实在,个人与社会,理性与感情,知识与信仰,或体质与精神,皆为此二者之代表,互相撑拒,以成人世之悲剧,而人生意义,亦即在斯。即文艺思想消长之势,亦复如是,而其迹在中古为尤著也。」(『歐洲文學史』一一二頁)

(16)「新希腊主义（Neo Hellenism）之复兴，实现代思想之特征，至可注意者也。」（『歐洲文學史』五六頁）

(17)「以上所说谓十七十八世纪欧洲文学大纲，与文艺复兴合称古典主义文学。虽历年五百，分国五六，然有共通现象，一以贯之，即以古典为依归是也。（中略）虽亦取法古代文学，而所重在形式，此十七十八世纪之趋势，与文艺复兴期之所以异。本源出于一，而流别乃实相抗矣。」（『歐洲文學史』一七六頁）

(18)「盖希腊文化，以中和（Sophrosyne）称。尚美而不违道德，主情而不失理智，重思索而不害实行。古典主义即从此出，而复有异者，各见其一端故也。」（『歐洲文學史』一七六頁）

(19)「文艺复兴期，以古典文学为师法，而重在情思，故又可称之曰第一传奇主义（Romanticism）时代。十七十八世纪，偏主理性，则为第一古典主义（Classicism）时代。（中略）惟是二者，互相推移，以成十九世纪之文学。及于近世，乃协合而为一，即新传奇主义是也。」（『歐洲文學史』一七六～一七七頁）

(20) Frederick William Robertson（1816-1853）：イギリスの説教家。

(21)「英国Frederick Robertson论希腊思想，立四要义，曰一无间之奋斗，二现世主义，三美之崇拜，四人神之崇拜。」（『歐洲文學史』五六頁）

(22)「今得合之为二，曰美之宗教，曰现世思想，略言其要。」（『歐洲文學史』五六頁）

(23)「盖皆希腊古代之精神，而后世文艺思潮中，时或隐见，至近来乃益显。新希腊主义（Neo Hellenism）之复兴，实现代思想之特征，至可注意者也。」（『歐洲文學史』五六頁）

(24)「希腊神话，内容美富，为他民族所莫及。其尤异者，为纯粹之神人同形说（Anthropomorphism）。」（『歐洲文學史』五六頁）

(25) 周作人はギリシアの「美の宗教」の表れとしてギリシア神話を見ていると言える。周作人はこの後、ギリシア神話の翻訳紹介を晩年に至るまで継続していくが、ギリシア神話をギリシアの特長としての「美の宗教」が表れたものとして高く評価したことが動機となったのではないか。また、周作人は日本留学中にアンドリュー・ラングの文化人類学的神話学に傾倒し、『歐洲文學史』のギリシア神話に関する解説でもラングの論を用いているように、文化人類学

的視点も併せ持っていたと言える。

(26) Walter Pater "The Renaissance: Studies in Art and Poetry"。『周作人日記』の一九一七年一〇月二〇日の項には、「閲ペーテル著文芸復興」とある。また同年一一月一七日の項には丸善から同書を購入したとある。さらに同年一二月一一日の項には、「閲ペーテル著 Winckelmann 論」とあるので、周作人が "The Renaissance" の "Winckelmann" の章を読んだことが分かる。

(27) 「德国 Winckelmann 著古代美术史，有言曰，世无民族重美如希腊人者。诸神之祭祝，皆少年竞美得赏者为之。斯巴达妇人，恒奉 Narkissos 或 Hyakinthos 之象，求得子之美如此也。少年祷神，至宁得美而不愿得国，可以知一世之风尚矣。Platon 亦以体美为精神美之发现。」(『歐洲文學史』五七頁)

ペイター "The Renaissance" の該当箇所は以下の通り。

「ヴィンケルマンは言っている。『ギリシア人ほど美を高く評価した人々はいない。アイガイのゼウスやイスメーノスのアポロンの若い祭司たち、タナグラでヘルメスのパレードの先頭に立ち、肩に子羊を背負って歩く祭司は、常に美の賞を与えられた若者たちであった。(中略) 美に対する一般の評価が非常に高くなり、スパルタの女性たちは美しい子供を生めるように、寝室にニレウス、ナルキッソス、ヒュアキントスなどの像を置いた。(中略)「神々に誓って言うが、私は王冠よりも美しい体を望む」これこそ、世界の一時代が選択した、より高尚な生活のあり方である。』」

"'By no people,' says Winckelmann, 'has beauty been so highly esteemed as by the Greeks. The priests of a youthful Jupiter at Aegae, of the Ismenian Apollo, and the priest who at Tanagra led the procession of Nercury, bearing a lamb upon his shoulders, were always youths to whom the prize of beauty had been awarded. (中略) The general esteem for beauty went so far, that the Spartan women set up in their bedchambers a Nireus, a Narcissus, or a Hyacinth, that they might bear beautiful children. (中略) "I take the gods to witness, I had rather have a fair body than a king's crown" that is the form in which one age of the world chose the higher life.' " ("The Renaissance" p.218-219)

(28)「或问希腊雕刻家 Phidias，何故以人象神，则答曰，以天地之间更无他物，具匀齐之美，过于人体故。」(『歐洲文學史』五七頁)
厨川『文藝思潮論』の該当箇所は以下の通り。
「何が故に希臘人は神靈に人間の體を與へたかといふ問に對して、希臘彫刻の祖 Phidias は答へて、天地間に人體ほど整齊の美を盡くしたものは他に無いからであると云つた。」(『文藝思潮論』一八七～一八八頁)
(29)「希腊尚美，以人体之美，归之于神。」(『歐洲文學史』五七頁)
(30)「又重现世，故复以人生之乐归之。」(『歐洲文學史』五七頁)
(31)「Epikharmos 有诗，述人生四愿，首即富美。」(『歐洲文學史』五七頁)
ペイター "The Renaissance" の該当箇所は次の通り。
「シモニデスまたはエピカルモスの作とされる四つの願いを歌った古代の歌では、第一が健康、第二が美である。」
"In an ancient song, ascribed to Simonides or Epicharmus, of four wishes, the first was health, the second beauty."
("The Renaissance"p.219)
周作人は、"health" を "wealth" と誤解して「富」と訳したものと思われる。
(32)「Solon 说幸福，以为苟得支体强健，面目美好，子孙茂盛，无疾病灾祸，以至善终，是为全福，皆同此意。」(『歐洲文學史』五七～五八頁) 厨川『文藝思潮論』(「第五：希臘思潮の勝利：3、現在生活の享樂」) の該当箇所は以下の通り。
「Solon の言葉として傳へられてゐる幸福説に、『人もし四肢すこやかに、病なく、不幸なく、兒孫榮え、自らも風采よければ、またそのうへ臨終も事なければ、まことの幸福と呼ぶことを得む』とある。」(『文藝思潮論』一六二頁)
(33)「盖希腊之民，唯以现世幸福为人类之的，故努力以求之，(中略) 所谓人生之战士之生活。故异于归心天国，遁遯世无闷之徒」(『歐洲文學史』五八頁)
(34)「希腊思想，既具以上二事，复有第三德以节制之，乃能发达极盛，不至于偏。盖其民特具中和之性 (Sophrosyne)，以放逸 (Hybris) 为大戒。」(『歐洲文學史』五八頁)

(35) G. Murray “The Rise of the Greek Epic” の該当箇所は以下の通り。

「これと関連して、初期のギリシア人たちが常に賞賛し、その欠如は非常に残念なこととして非難された、大切な美徳を考えずにはいられない。この特別な言葉である “Sôphrosynê” を便宜的に『節制』と訳す。“sôphrosynê” の意味はその用法を見ることによってのみ分かるものであり、ここでは詳しく述べない。ギリシアの『度を越さない』(Μηδὲν ἄγαν) というルールと密接な関係がある。このルールはありふれたものに思われるが、当時においては盲目的な情欲や勝利の復讐を押し止めたのである。」

“One cannot but think, in this connexion, of that the special virtue which the early Greeks are always praising, and failure in which is so regrettfully condemned, the elusive word which we feebly translate by ‘Temperance’, Sôphrosynê. The meaning of sôphrosynê can only be seen by observation of its usage — a point we cannot go into here. It is closely related that old Greek rule of Μηδὲν ἄγαν, nothing too much, which seems rather commonplace, but has in its time stayed so many blind lusts and triumphant vengeances.” (“The rise of the Greek epic” p.47-48)

「ホメロスの叙事詩で使われている非難の言葉の多くは、何らかの『過度』・『行き過ぎ』を意味し、人が自分自身を抑えるべき地点の存在を示している。悪人は『常軌を逸した者』(ἀτάσθαλοι)、『度を過ごした者』(ὑπερήφανοι)、『正道（正義、法）から外れた者』(ἄδικοι) であり、その最たるもの、悪は “ Ὕβρις” である。この言葉は “σωφροσύνη” (精神の健全さ) と “αἰδώς” (羞恥心・尊厳) の反義語である。」

“Most of the Homeric words of disapproval mean something like ‘excess’, or ‘going too far’, and imply that there are points where a man should check himself. The wicked are ἀτάσθαλοι, ‘outrageous’, ὑπερήφανοι, ‘overweening’, ’ ἄδικοι, ‘away from Dikê’, justice or law : most of all, wickedness is “Ὕβρις. That word is the antithesis of σωφροσύνη and of αἰδώς” (“The Rise of the Greek Epic” p.337)

(36) 「希腊思想，于是中绝。更越千载，乃复发现，为文艺复兴主因，至于今日而弥益盛大也。」(『歐洲文學史』五九頁)

(37) 周作人は日本の明治維新を一種のルネサンスと見ていた。「維新以後西洋の思想が優位を占め、文学にも非常に大き

な変化が起こった。明治の四十五年間で、ヨーロッパのルネサンス以来の思想をほぼすべて、順を追って通過した。」

「到了维新以后，西洋思想占了优势，文学也生了一个极大变化。明治四十五年中，差不多将欧洲文艺复兴以来的思想，逐层通过：」（「日本近三十年小説之發達」一九一八年五月二〇日～六月一日、『北京大学日刊』第一四一号～第一五二号所載。『藝術與生活』所収。『周作人散文全集』第二巻、四二頁）

(38) ペイターは“The Renaissance”において、古代・中世・ルネサンスの連続性を意識し、ルネサンスを十二世紀末乃至十三世紀初頭のフランスに始まったと論じている。

(39) 「英人 Walter Pater 论之曰〝中古文艺…复兴时，人人欲得心之自由，求理性与神思之发展，是时有一极大特色，即非礼法主义（Antinomianism）是也。其反抗宗教道德，寻求官能与神思之悦乐，对于美及人体之崇拜，皆与基督教思想背驰。」（『歐洲文學史』一一九～一二〇頁）

(40) “One of the strongest characteristics of that outbreak of the reason and the imagination, of that assertion of the liberty of the heart, in the middle age, which I have termed a medieval Renaissance, was its antinomianism, its spirit of rebellion and revolt against the moral and religious ideas of the time. In their search after the pleasure of the senses and the imagination, in their care for beauty, in their worship of the body, people were impelled beyond the bounds of the Christian ideal;” (“The Renaissance” p.25-26)

(41) 「其尊崇爱恋，如新建宗教。是盖可谓之异教诸神之重来。如古传说所言，Venus 未死，但匿居山穴，时至复出。」（『歐洲文學史』一二〇頁）

ペイター書の該当箇所は以下の通り。

「そして彼らの愛は時に奇妙な偶像崇拝、（キリスト教の：筆者）競争相手である奇妙な宗教となった。それは、死せずしてヴェヌスベルクの洞窟に一時隠れていただけのウェヌスの復帰であった。」

“and their love became sometimes a strange idolatry, a strange rival religion. It was the return of that ancient Venus, not dead, but only hidden for a time in the cave of the Venusberg,” (“The Renaissance” p.26)

(42)『周作人日記』によると周作人は、“Carmina Burana”（“Carmina Vagorum”）の英訳、John Addington Symonds “Wine, Women and Song”を一九一七年一一月に入手している。

(43)「咏人体之美，最著名。」（『歐洲文學史』一二〇頁）

(44) 厨川は、周作人も入手していたSymonds “Wine, Women and Song”から引用しており、“Lydia Bella”というラテン語の題名もSymonds訳の“To Lydia”により『リディアに寄す』と訳している。筆者が本文中に翻訳引用したのも厨川が引用したSymondsの英訳によっている。Symonds訳の原文は以下の通り。

TO LYDIA

Lydia bright, thou girl white
Than the milk of morning new,
Or young lilies in the light!
Matched with thy rose-whiteness, hue
Of red rose or white rose pales,
And the polished ivory fails,
Ivory fails.　　（以上、厨川：七二頁）

(45)「诗亦多仿宗教颂歌体式，唯其内容，则为诗酒爱恋三者，背弃宗信，脱略礼法，以乐生享美为人生目的。（中略）其思想与当世信仰制度，已不相属，复归于异教精神，开文艺复兴之先路。」（『歐洲文學史』一二〇～一二一頁）

(46)「周作人所提出的人本位主义文艺观基本上欧洲文艺复兴时期人文主义思想的在中国的再发现。」（钱理群『周作人论』第一编「二、探索中国现代文学发展的道路——周作人、鲁迅文学观的比较」四六頁）

(47) 罗岗『历史汇流中的抉择』（中国社会科学出版社、一九九三年）、王向远「周作人文学观念形成演变及来自日本的影响」（『鲁迅研究月刊』一九九八年〇一期、一九九八年一月）、方长安「形成、调整与质变—周作人〝人的文学〟观与日本文学的关系」（『文学评论』二〇〇四年〇三期、二〇〇四年三月）、黎杨全「论厨川白村对周作人文学观的影响」

（『海南大学学报』人文社会科学版二〇〇五年〇二期、二〇〇五年六月）

（48）小川利康「五四時期の周作人の文学観――W・ブレイク、L・トルストイの受容を中心に」（『日本中国学会報』第四十二集、一九九〇年）、尾崎文昭「鄭振鐸の『血と涙の文学』提唱と費覚天の『革命文学』論…五四退潮期の文学状況（二）」（『明治大学教養論集』二一七号、一九八九年）。

（49）「我要说的是希腊同中国一样是老年国，一样有这些坏处，然而他毕竟能够摆脱土耳其的束缚，在现今成为一个像样的国度，这到底是什么缘故？」（「新希臘與中国」：『晨報』一九二一年九月二九日。『周作人散文全集』第二卷、四一一頁）

（50）「希腊人有一种特性，也是从先代遗留下来的，是热烈的求生欲望。他不是只求苟延残喘的活命，乃是希求美的健全的充实的生活。」（「新希臘與中国」：『周作人散文全集』第二卷、四一一頁）

（51）拙稿「周作人とギリシア文学――一九二一年における転回と文学的アイデンティティーの確立を中心に」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第三号、二〇〇〇年四月）参照。

（52）「生活之藝術」：『語絲』第一期（一九二四年一一月一七日）所載。『雨天的書』所収。

（53）「这种〝新的自由与新的节制〟，不仅〝与西方文化的基础之希腊文明相合一〟，而且必然是孔孟〝〝本来的礼〟与〝本来的中庸〟的复兴〟。这标示着周作人思想上的一个转折：在此之前，他主要是向西方寻找出路，借用西方文明来冲击东方传统文化，现在他开始着力于寻找西方文化与东方传统文化的共同点，（中略）他所追求的〝生活之艺术〟就不仅有英国绅士味，而且更具有中国传统的封建士大夫色彩。」（钱理群『周作人论』第一编「四、两大文化撞击中的选择与归宿」八三頁）

（54）「生活之艺术只在禁欲与纵欲的调和。」（「生活之藝術」：『周作人散文全集』第三卷、五一三頁）

（55）「有人以此二者（即禁欲与耽溺）之一为其生活之唯一目的者，其人将在尚未生活之前早已死了。」（「生活之藝術」：『周作人散文全集』第三卷、五一三頁）

エリス書の該当箇所では以下の通り。

「専らどちらか一方だけを人生の目的とする者は、生活を始める以前にすでに死んでいることになろう。」
“The man who makes the one or the other his exclusive aim in life will die before he has ever begun to live.” (“Affirmation” ‘St. Francis and others’, p.220)

(56) 「生活之艺术，其方法只在于微妙地混合取与舍二者而已。」(「生活之藝術」:『周作人散文全集』第三巻、五一三頁〉
エリス書の該当箇所は以下の通り。
「生活の芸術のすべては、放出と抑制を微妙に織り交ぜることにある。」
“All the art of the living lies in a fine mingling of letting go and holding in.” (“Affirmation” ‘St. Francis and others’, p.220)

(57) 「这生活之艺术在有礼节重中庸的中国本来不是什么新奇的事物。」(「生活之藝術」:『周作人散文全集』第三巻、五一四頁〉

(58) 周作人の「中庸」の概念とエリスとの関係については、小川利康「周作人とH・エリス――一九二〇年代を中心に――」(『早稲田大学大学院・文学研究科紀要別冊』一五、一九八八年〉に詳述されている。

(59) “To live in the present, to suffer and to enjoy our actual evil and good, facing it squarely and making our account with it — that we cannot do : that was the way of the Greeks and Romans ; it is not our way.” (“Affirmation” ‘St. Francis and others’, p.242)

(60) 周作人が基づいたエリス“St. Francis and others”(「聖フランシスその他」)や“Studies in the Psychology of Sex”(『性の心理』)は、古代ギリシア人を肯定的な事例として挙げることが多く、周作人がエリスに基づいて「生活の芸術」の理想を打ち出した際、その理想の体現者として古代ギリシア人を思い描いたのは、エリスの書によるところが多いと考えられる。例えば、周作人が後の作品で引用したエリス“St. Francis and others”の一節には次のようなものがある。
「ギリシア人はかつて裸体を喜ばないことをペルシア人およびその他の夷人の特性と見なした。日本人――時代と風

土を異にするギリシア人――も西方の夷人の淫逸な羞恥の目によって教えられるまでは、裸体を忌避することなど思いも及ばなかった。」（「希腊人曾将不喜裸体这件事看作波斯人及其他夷人的一种特性，日本人――别一时代的与风土的希腊人――也并不想到避忌裸体，直到那西方夷人的淫逸的怕羞的眼告诉了他们。」）（周作人「懐東京」、一九三六年八月八日作、同年九月一六日『宇宙風』第二五期。『瓜豆集』所収。『周作人散文全集』第七巻、三二九頁）ここでエリスは古代ギリシア人と日本人を共通の特長を持つものとして論じ、裸体に対する健全な感覚を持つ民族として評価している。

(61)「中国現在所切要的是一种新的自由与新的节制，去建造中国新的文明，也就是复兴千年前的旧文明，也就是与西方文化的基础之希腊文明相合一了。」（「生活之藝術」：『周作人散文全集』第三巻、五一四頁）

(62) この後、周作人はハリソン“Mythology”の第三章全編を「論山母」の題で一九二八年一月に翻訳発表する（『北新』二巻五号所載）。

(63)「这是希腊的美术家与诗人的职务，来湔除宗教的恐怖分子。这是我们对于希腊的神话作者的最大负债。」（「論鬼臉」：『語絲』四二期、一九二五年八月）

(64)「希腊民族不是受祭司支配而是受诗人支配的，照〝诗人〟（Poetes）这字的原意，这确是〝造作者〟，艺术家的民族。」（「『希臘神話』引言：『語絲』九四期、一九二六年八月）

(65)「希腊文明的精神，很有许多表现在神话里面。这种精神的特点――也就是希腊人人生观的特点――有二：一是现实主义，一是爱美的精神。」（「希臘閑話」：『新生』一巻二期、一九二六年一二月二四日。『周作人散文全集』第四巻、八三六頁）

(66)「（一）古代的现世主义，希腊可为代表。关于〝死后生活如何〟这个问题，神话中有两种答法。」（「希臘閑話」：『周作人散文全集』第四巻、八三六頁）

(67)「（二）希腊民族向来是爱美的民族，他们理想中的神的形象，也和别的民族不同。中国的神，有三头六臂青面獠牙种种奇形怪状；而埃及的神，更有人面兽身种种可怕的形象。希腊的神则不然，他们都是很美丽的，与人形象相同。」（同

前、八三七頁）

(68)「有人问雕刻家 Phidias，何以神与人相同：他说神想来是最好看的，世上惟人最美，所以相同。」（同前、八三七頁）

(69)「希腊的宗教没有专门的祭司们，也没有一定的圣书，保存宗教上的传说的只是一班诗人和美术家。所以他们能把原始时代传下来的丑陋分子，逐渐美化。」（同前、八三七頁）

(70)「这一种〝美化〟的精神，便是希腊人现世主义与爱美观念充分的表现，于文化进化至有关系，欧洲中古的黑暗时代之变为文艺复兴，可以算是一种实例。」（同前、八三八頁）

(71)「中国的现世主义是可佩服的，（中略）不过中国文明没有希腊文明爱美的特长，所以虽是相似，却未免有流于俗恶的地方。」（同前、八三九頁）

(72)「沙漠之夢」（一九二六年七月『駱駝』一期）によると翻訳は一九二四年春に行われた。

(73) F. A. Wright "A History of Later Greek Literature from the death of Alexander in 323 B. C. to the death of Justinian in 565 A. D." (London, George Routledge & Sons., 1932) なお、周作人は題名を『希臘晩世文学史』と訳している。

(74) Apollodorus "The Library": with an English translation by Sir James George Frazer : London, W. Heinemann. New York, G. P. Putnam, 1921, 2vol, The Loeb Classical Library)

(75)「『希臘神話』引言」（『藝文雜誌』二巻一〇期、一九四四年一〇月。『立春以前』所収。『周作人散文全集』第九巻、二六三～二六六頁）参照。

(76)「我所写的关于中国文学和思想的文章，较为重要的有这四篇」（『知堂回想録』「一七九、反動老作家一」。『周作人散文全集』第一三巻、七六二頁）

(77)「漢文學的傳統」：一九四〇年三月二七日執筆。『中國文藝』二巻三期（一九四〇年五月一日）所載。『藥堂雜文』所収。

(78)「中國的思想問題」：一九四二年一一月一八日執筆。『中和月刊』四巻一期（一九四三年一月一日）所載。『藥堂雜文』所収。

(79)「中國文學上的兩種思想」：一九四三年四月一三日、南京中央大学での講演。『藝文雜誌』一巻一期（一九四三年七月

一日）所載。『藥堂雜文』所収。

(80)『漢文學的前途』：一九四三年七月二〇日執筆。『藝文雜誌』一巻三期（一九四三年九月一日）所載。『藥堂雜文』所収。

(81) 木山英雄氏は「彼（周作人：筆者）は、淪陥区と抗日区の間の「分離」が、「政治」からさらに「文化ないし思想感情」にまで及びかねぬ実情をまのあたりにしながら、民族的価値のいっそう自明な形を求めて、「漢字」「漢文」「漢文学」の一貫した系列に考え及んだ」と論じている。木山英雄『周作人「対日協力」の顛末』（二〇〇四年七月、岩波書店）一九三頁。

(82) 木山英雄『周作人「対日協力」の顛末』（二〇〇四年七月、岩波書店）二〇〇頁。

(83)「新中國文學復興的途徑」：『中國文学』創刊号（一九四四年一月二〇日）所載。

(84)「（前略）认清了上自圣贤下至凡民所同具的中国固有思想，外加世界人类所共有的新兴文明，胆大心细的决行调整，基础既定，然后文化工作才可以进行。」（「中國新文学復興之途徑」：『周作人散文全集』第九巻、三一頁）

(85)「文藝復興之夢」：『求是月刊』第一巻第三号（一九四四年五月一五日）所載。『苦口甘口』所収。

(86)「根据欧洲中世纪的前例，在固有的政教的传统上，加上外来的文化的影响，发生变化，结果成为文艺复兴这段光荣的历史。中国如有文艺复兴发生，原因大概也应当如此。」（「文藝復興之夢」：『周作人散文全集』第九巻、一七九頁）

(87)「对于外国文化的影响，应溯流寻源，不仅以现代为足，直寻求其古典的根源而接受之」（「文藝復興之夢」：『周作人散文全集』第九巻、一八〇頁）

(88)『藝文雜誌』第二巻第七、八期合刊（一九四四年八月一日刊）所載。『苦口甘口』所収。

(89)「这样看来，希腊人的爱美并不是简单的事，这与驱除恐怖相连结，影响于后世者极巨，很值得我们的注意。」（「希臘之餘光」：『周作人散文全集』第九巻、二五二頁）

(90)「希腊罗马的文化已古老矣，惟其法力却仍复极大，当时古典之研究与传播虽或似有闲的工作，而其影响效力乃有如此者，此看似奇怪，实在则亦并不奇也。」（「文藝復興之夢」『周作人散文全集』第九巻、一七七頁）

＊本文中において中国語・英語の作品名は基本的に原題を用い、適宜日本語訳を補った。
＊日本語に翻訳して引用した文の原文は、すべて注釈に示した。
＊引用に用いたテキストは以下の通り。（引用箇所のページ数はこれらに拠る。）

钱理群『周作人论』（上海人民出版社、一九九一年）
周作人『欧洲文学史』（岳麓书社、一九八九年）
钟叔河编『周作人散文全集』全一五巻（广西师范大学出版社、二〇〇九年四月）
厨川白村『文藝思潮論』（大日本圖書、一九一四年）
木山英雄『周作人「対日協力」の顛末』（岩波書店、二〇〇四年七月）
Hippolyte Taine “History of English Literature” (translated by H. Van Laun. London, Chatto and Windus, 1906)
Walter Pater “The Renaissance, Studies in Art and Poetry” (London, Macmillan, 1912)
Gilbert Murray “The Rise of the Greek Epic” (Oxford, Clarendon Press, 1911)
Havelock Ellis “Affirmation” (London, Walter Scott, limited, 1898)

＊本稿は二〇〇六年九月、准教授昇格審査論文として慶應義塾大学経済学部に提出したものを修訂したものである。